昭和五十八年度国文学会活動状況

＜総会・研究発表会＞（十二月十一日　至誠館会議室）

- 竹取物語のウタとカタリ　広田　収（本学専任講師）
- 明治三十六年の鏡花――「薬草取」・「白羽箭」――　田中励儀（神戸松蔭女子学院大学専任講師）

＜講演会＞（一月二十一日　神学館チャペル）

- 伝承の型――日本文化の基層――　荒木博之（広島大学教授）

シンポジウム　井本英一（大阪外国語大学教授）
土橋　寛（同志社大学名誉教授）

昭和五十八年度卒業生卒業論文題目

オオナムチ・スクナヒコナ二神伝承論　丹羽裕子
巡行伝承論　岡地麻理子
蛇聟入譚の伝承構造　鈴木順子
小さ子伝承の諸相とその基層――雷神とのかかわり――　辻野仁美
晴明説話の本質と基層　梅田裕子
浦嶼子伝承の考察――氏族伝承論をめぐって――　山本康一
民話・愚か村の構造　石堂みよか
萬葉挽歌の抒情性――行路死人歌を中心に――　斉藤典子
山部赤人――その長歌と反歌の関わり――　佐々木　稔
『源氏物語』における薫の救いとその不可能性　平野達郎
『竹取物語』の文学的価値――かぐや姫の昇天より――　中嶋美奈
『源氏物語』における「もののけ」の特質について　大谷由香
『源氏物語』の引歌　添田雅江
物語における人物の対――『源氏物語』を中心にして――　鈴木あずさ
清少納言の感覚　田中典子
『源氏物語』における烏滸の役割　山鹿雅子
宇治大君の結婚拒否と女としての幸福　大和理子
帚木三帖における光源氏の行動原理　吉川早和子
覚一本における屋島合戦の意識と構想　川西真代
商人物狂言の分析　北村博美
『平家物語』祇王説話の成長過程　松村利香子

狂言の演劇的特性と戯曲的特性について　森　良徳
真名本『曽我物語』小考　能登理香子
平重衡・その人物像　榊原悦子
『将門記』の歌について　野村正彦

『傾城反魂香』の又平について　相坂陽子
芭蕉その旅と文学――紀行文を中心に――　藤田康広
『心中天の網島』の方法――改作物との比較を通して――　福呂由美
遊女阿古屋の発見――近松の女性形象の出発点――　後口寺利花
『世間胸算用』の本質について　堀内基行
説経節『しんとく丸』考　池永典子
『心中天の網島』――女同士の義理――　磯貝由利子
『女殺油地獄』について　岩崎貞治
『日本永代蔵』における矛盾　川上智子
『しんとく丸』考――「申し子譚」をめぐって――　北野敬子
『薄雪物語』典拠考――第十一・十二通をめぐって――　小嶋美奈
『おくのほそ道』の「市振の条」における芭蕉の創作意識を考える　小西孝宏
『好色五人女』研究――「恋草からげし八百屋物語」をめぐって――　栗山啓子

世話物における男主人公の性格――『曽根崎心中』の徳兵衛を中心にして――　丸山　博
好色一代男における笑いについて　増田雄一
『心中天の網島』に見える女性像　松本わか子
近松享保期時代浄瑠璃の方法　松浦真也
『曽根崎心中』観音廻り――そのとらえかたについて――　中山明美
近松世話浄瑠璃　愛を貫いた人々　新居美幸
『世間胸算用』の視点をめぐって　園城牧子
近松心中浄瑠璃の構造　尾崎知美
『世間胸算用』について――商取引のかけひきを中心として――　三枝浩樹
『世継曽我』における近世――曽我物の変貌――　阪本和子
『心中重井筒』論――近松世話浄瑠璃の新たな方法――　渋谷美紀
『東山殿子日遊』論――『出世景清』につらなる「敵役ドラマ」の方法――　白瀬浩司
芭蕉発句の韻律からの考察　園田美佐子
『心中重井筒』小論　高橋幹子
『本朝二十不孝』論――その方法を中心に――　高尾斉子
宮木と磯良　竹内やよい
説経『小栗判官』の考察　辻　春美

『三冊子』について――蕉風俳諧における位置づけをめぐって――　辻井純子
『世間胸算用』における〈無名性〉について　梅原三代子
『傾城反魂香』について　山縣靖子
『曽根崎心中』と『生玉心中』との比較　山本美砂
『日本永代蔵』における神仏信仰について　保田真美
『女殺油地獄』論　横塚敏夫
『曽根崎心中』をめぐって　横山久
近松門左衛門における世話浄瑠璃の戯曲構造　寄川美幸
西鶴とキリスト教的ヒューマニズム――『好色五人女』をめぐって――　井尻功
近松世話浄瑠璃に登場する道化について　武田浩
『好色五人女』と「もじり」の関係　平岩浩幸
「大名狂言」考　石田武志
『出世景清』論　桐山桂一
『心中二枚絵草子』の独自性――『心中抱合河』との比較を中心にして――　佐野昭洋
芥川龍之介論――初期歴史小説をめぐって――　安達史子
宮沢賢治「雨ニモマケズ」論考　荒木佳子
泉鏡花『高野聖』論　近浦生子
『坊っちゃん』論――その勧善懲悪の方法について――　藤井恭子
島崎藤村『夜明け前』について　開英治
宮澤賢治『注文の多い料理店』論　稲場栄子
近代知識人の孤独――『行人』を軸に――　石田涼
『山の音』考　加藤洋二
梶井基次郎論――その逃亡と回帰について――　公森泰子
三島由紀夫『仮面の告白』論――「仮面」としての自伝的告白小説――　倉橋七七子
谷崎潤一郎と『細雪』　松本智之
日常におけるニヒリズムの克服――『美しい女』を中心にして――　元木園恵
田山花袋のいわゆる〝少女病〟について――その資質紀行家としての眼――　中村優子
横光利一と『旅愁』――時代の状況と文学の自律性――　楢崎晶子
「石川啄木」――啄木における「故郷」と「家」からの考察――　野田敦子
漱石『こころ』における故郷　塩川幸俊
小田原事件の周辺――谷崎文学における結婚の意義――　塩満千豊
『浮雲』について　高橋保博

『家』論　吉田　隆
宮沢賢治の口語詩――『春と修羅』を中心に――　古市幸子
独歩『春の鳥』論　湊崎英子
山本周五郎論　福井秀子
五木寛之『青春の門』論――連帯者に捧げる〝カタロニア挽歌〟――　佐藤吉雄
啄木と蘇峰――啄木の全体像回復のための一つの試み――　古沢夕起子
『春と修羅』から文語詩へ――賢治の求めていたもの――　保科　彰
森鷗外における「青年」の意義――小説による考察――　稲葉淳子
梶井基次郎論――〈生活〉における方法的態度――　北原祐子
中島敦論――自己存在の意味を求めて――　満保和志
坂口安吾『絶対の孤独』と女たち　松下裕美子
高橋和巳と「妹」　桜田美幸
幸田文『北愁』論　吉田悦子
現代日本語における語頭の濁音について　福西弘美
平安朝日記・随筆にみられる「いみじ」「いたし」の意義と性格――『今昔物語集』と比較して――　伊庭慶子
『平家物語』の漢語について　今井和子
明治時代の小説における助動詞マイ　亀村眞一
明治後期・大正・昭和初期の外来語――教科書・新聞をもとにして――　北尾佳子
明治時代の接尾辞「的」について　蔵田かすみ
昭和期江戸語における断定の助動詞「だ」「じゃ」について――とくに洒落本をめぐって――　黒木英博
音韻論からみる現代日本語における二音節の和語名詞について　中村仁美
幼児の言語――就学前児童の日常会話の観察をとおして――　中村泰子
現代における敬語――とくに謙譲表現をめぐって――　西崎雄治
類義語の一考察――使用度と語感――　高瀬治子
「カタカナ語」考――新聞広告にみられるカタカナ語――　徳舛彰子
「もって」の意味・用法の成立と変遷　鶴田昌二
『東海道中膝栗毛』の文体　井上伸児

昭和五十八年度大学院修了生修士論文題目

小名狂言の方法　稲田秀雄
晩年の漱石文学の研究――『道草』から『明暗』へ――　于　耀明